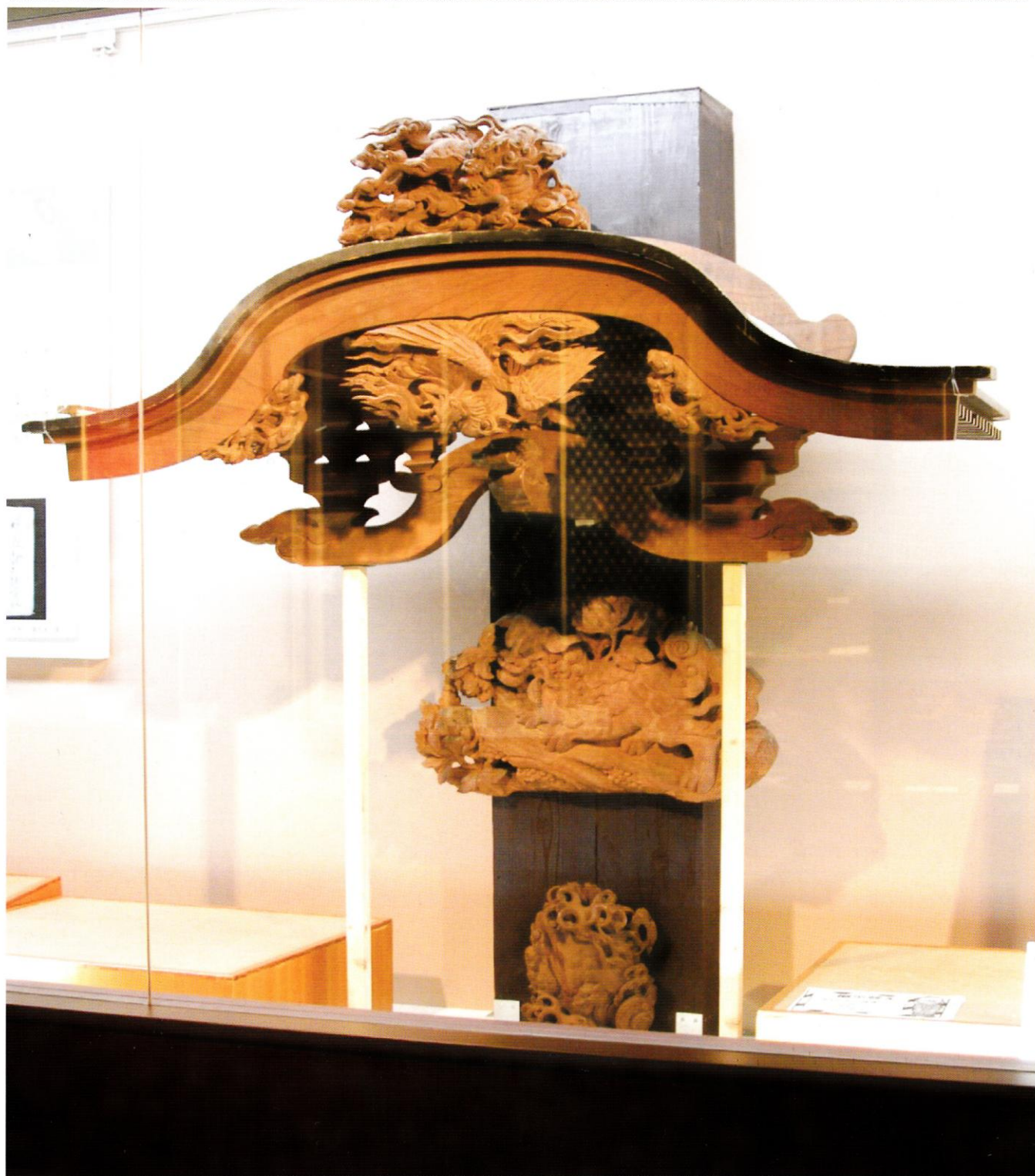


資料館だより

第53号

平成24年(2012)
3月25日 発行



みねおおのぼりかざりちょうこく
資料館常設展示室の「峰大幟飾彫刻」

(縦の白いスジなどは、ガラスに反射した反対側の展示物の残像)

「峰大幟飾彫刻」 — 武蔵村山市峰地区に残されていた「大幟」と「飾彫刻」 —

武蔵村山市立歴史民俗資料館 高橋 健樹

1 はじめに

江戸時代後期から明治・大正時代にかけて、神社の祭礼を知らせる大幟（おおのぼり）が神社参道の入口や街道辻に立てられ、その大きさを競い合っていました。そして、その大幟を掲げる幟竿（のぼりざお）は、象鼻形木鼻簪（ぞうびけいきばなかんざし）に挟まれしっかりと旗杭（はたぐい）に固定されていました。その旗杭の上部には唐破風（からはふ）屋根と大ぶりの飾彫刻（かざりちょうこく）が配され、基部も飾彫刻で装飾されるなど、祭礼に彩りを加えていました。

平成22年の春、三ツ木地区の峰自治会から「明

治から大正時代にかけて立てられた大幟と簪・飾彫刻等」が寄贈されました。

武蔵村山に電柱が設置された大正6年以降、立てられておらず、組み立て方も不明でしたが、宿組や砂川地域の情報をもとにほぼ復元出来たことから、「市立歴史民俗資料館開館30周年記念事業」の一環として、平成23年5月21日からほぼ1ヶ月間、企画展として公開しました。そして、この度、江戸後期の伝統工芸と明治初期の祭礼にかけた庶民の力強さをご鑑賞いただくために、飾彫刻部分を常設展示室内に設置しました。

2 寄贈された峰大幟と飾彫刻

寄贈された資料は、「大幟」と大幟を旗竿に取り付ける「ぐるり」「かんざし（腕木）」「吊輪」、旗杭に取り付けた「破風型底部一式」、「飾彫刻（唐獅子牡丹・麒麟・鳳凰・玄武等）」、旗竿を支える

ための旗杭用「象鼻形木鼻簪」類、下げ提灯用の「太鼓橋状屋根」がそれぞれ2組と、その資料を収納していた木製箱4箱などでした。寄贈品の概要は以下のとおりです。

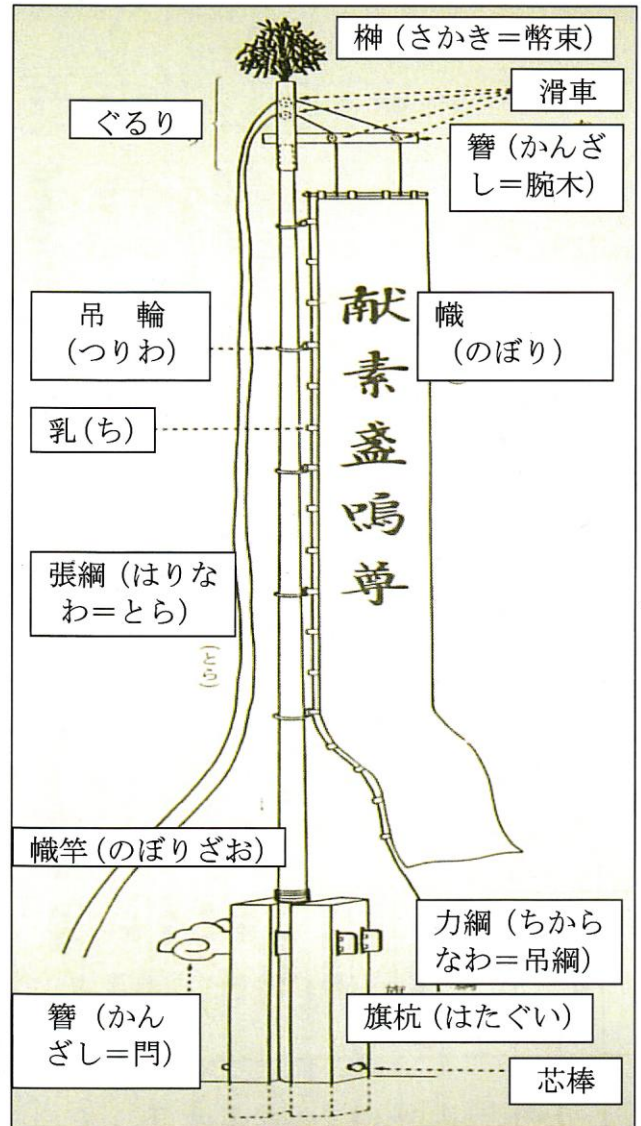
番号	名称	材質	規模 (cm)			点数	備考
			長	幅	厚		
1	大幟旗竿先端筒	竹	294	10	10	2	合わせて保管
2	大幟旗竿先端横竿	樺	394	10	5	2	
3	唐破風形庇 屋根部	杉	90	65	6	4	棟部を中央にして、左右対
4	唐破風形庇 棟部	杉	69	18	17	2	
5	唐破風形庇 先端部	樺	190	43	5	2	庇先端の飾り、唐破風形
6	唐破風形庇 奥支部	樺	120	35	3	2	唐破風棟部型の切込あり
7	唐破風形庇 支部材1	樺	68	9	5	4	断面変則五角形
8	唐破風形庇 支部材2	樺	79	7	5	2	ホゾ穴あり
9	唐破風形小屋組(組立型)	樺	122	54	7	2	9点の部材で構成
10	円弧形庇	杉	87	37	6	2	小型彫刻類用?
11	木鼻付大簪	樺	123	34	13	4	左右対、2組
12	木鼻付中簪	樺	83	27	10	2	左右対
13	木鼻付小簪	樺	83	14	7	2	左右対
14	唐獅子牡丹彫刻飾	樺	82	42	8	2	阿吽形、左右対
15	麒麟彫刻飾	樺	48	21	11	2	阿吽形、左右対
16	玄武彫刻飾	樺	36	28	14	2	阿吽形、左右対
17	鳳凰彫刻飾	樺	50	24	10	2	阿吽形、左右対
18	鶴彫刻飾	檜	58	22	5	1	
19	雲型飾	樺	27	10	6	4	左右対、2組
20	大幟旗「撃壊楽堯天」	布	1265	122		1	補修あり
21	大幟旗「謳歌実豊稔」	布	1255	115		1	補修あり
22	軍艦旗	布	405	365		1	
23	日章旗	布	410	363		1	
24	大幟旗収納箱	杉	145	72	65	1	造りが精巧で、旗と同時に作成。
25	大幟旗用綱	麻				5	太縄4束、細縄1束
26	大幟旗用綱収納箱	杉	78	44	33	1	大幟旗収納箱と近似。
27	大幟旗用ワッカ	籐	径25前後			27	14個・13個の2組
28	大幟部材収納箱(大)	杉・松	163	110	65	1	後世に作成。破損がひどく廃棄
29	大幟部材収納箱(小)	杉・松	121	61	48	1	後世に作成。破損がひどく廃棄
30	サルボボ	布				1	
						計	86

3 大幟と飾彫刻の形状

1) 大幟の全体像と各部名称



昭和記念公園こもれびの里の砂川五番組大幟



大幟各部名称



復元した峰大幟の先端部分

左上：立川市砂川五番組の大幟で、万延元年（1860）に制作されています。幟旗の長さが 12.5m と、峰大幟とほぼ同じ大きさですので、峰大幟の様子が想像できます。写真では設置されていませんが、唐破風屋根付飾彫刻も立派で、現在、国立昭和記念公園こもれびの里に保管されています。

右上：入間市教育委員会発行の「入間市の幟」90 頁に掲載された、幟各部名称図（イラスト宮岡久）を転写・加筆した図です。

左横：峰大幟の先端部分を復元展示したもので、「ぐるり」「簀（腕木）」が取り付けられ、幟上端の「乳」に横棒を差し込み、その横棒を綱で吊り下げ「腕木」・「ぐるり」に取り付けてある「滑車」を通して、幟を支える仕組みです。実際は「ぐるり」・「腕木」・「吊輪」・「張綱」を取り付けて竿を立てた後、「幟」の「乳」に横棒を差し込んで綱を結び、大幟を引き上げます。

2) 組み上がった飾彫刻

「幟旗」は、道路の両脇に立てることから2本必要となります。ですから、「旗竿」や2本一組の「旗杭」、「飾彫刻」も2組存在していたことになります。「飾彫刻」については、欠けることなく全ての部品が2組確認できました。

右の写真は、「旗杭」に設置された「飾彫刻」の全体と彫刻などの名称です。表紙の写真も右の写真も常設展示室に設置するため、「旗杭」を2m20cmほどにしているため本来の長さではありません。＜唐獅子牡丹＞彫刻と＜玄武＞彫刻の間は、ほぼ2m程度空いていたと思われます。

「飾彫刻」は、最上段に「唐破風屋根」と「飾小屋組」が組物となって取り付けられます。その下には、最も大型で「飾彫刻」の中心となる＜唐獅子牡丹＞が配置され、「旗杭」の最下部（幟竿と旗杭を繋ぐ芯棒の位置）には「芯棒」の頭を隠すように＜玄武＞が架けられています。



① 「垂木 (たるき)」の取り付け

「飾彫刻」を取り付けるために予め「旗杭」にはホゾ穴が穿たれています (写真1)。上のホゾに象鼻形木鼻状に彫刻した「垂木」を差し込み、木製の楔 (くさび) でしっかりと固定します (写真2)。この「垂木」が屋根の荷重を支えますので、中途半端な取り付けでは屋根が組立ちません。

② 「飾小屋組」の取り付け

「飾小屋組」は、上端に＜雲形＞彫刻を配し、唐草文を刻んだ「虹梁 (こうりょう)」を挟み、「肘木」先端を木鼻状に彫刻した「平四斗 (ひらよんと)」の下に「平三斗 (ひらさんど)」の組物を置き、「唐破風型梁 (海老虹梁?)」で支える形態です。「唐破風型梁」の先端部分は象鼻形木鼻彫刻が施され、その頸部に「平三斗」を立てていますが、「唐破風型梁」の中央近くに唐草文をあしらった小突起を設け、「斗皿 (とざら)」付の束を入れて「平四斗」のバランスをとっています。また、「唐破風型梁」には唐草文が刻まれ、中央上部の「墓股 (かえるまた)」の位置に＜波形に千鳥?＞彫刻が配されています。



写真1
ホゾ穴の様子

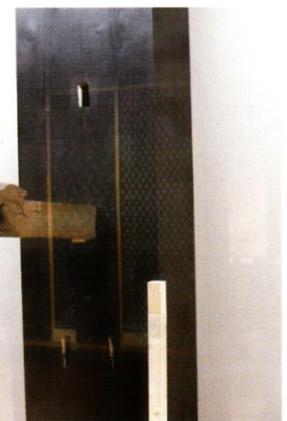


写真2
「垂木」の取り付け

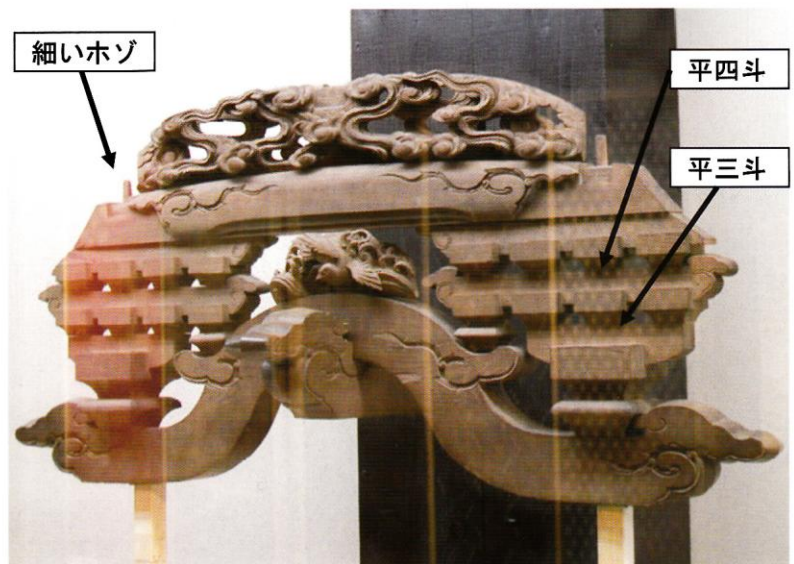


写真3 「飾小屋組」の取り付け

③ 「棟木 (むなぎ)」と「桁 (けた)」の取り付け

「垂木」に乗せる形で唐破風状の「屋根奥板」を取り付け、その奥板にホゾ付の「棟木」と「桁」を差し込みます。そして、奥板のホゾ穴にしっかりと固定されます (写真4)。

「棟木」は「飾小屋組」の上部中央に位置し、上部に乗せる「棟 (むね)」を受ける溝が両側に彫り込まれています。左右の「桁」は上面に外側への傾斜を付け、中央にホゾ穴が開けられていて、「虹梁」両端の細いホゾに (写真3参照) に差し込まれ、固定されます。

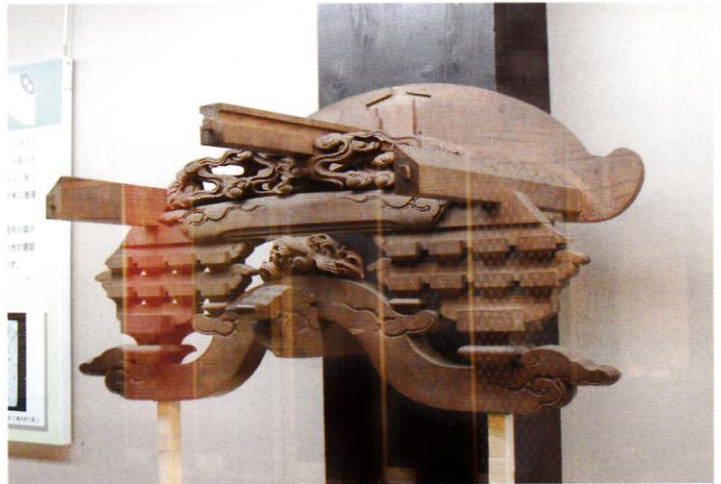


写真4 「棟木」と「桁」の取り付け

④ 棟の取り付け

「棟木」に乗せる五角形状の「棟」は、左右二つに分かれている屋根を固定するために、一对の縦板が付いています (写真5)。「屋根奥板」には部材を組み込むための溝 (写真4参照) が掘られていて、「棟木」のほぼ中央にも固定用のホゾ穴が穿たれています。

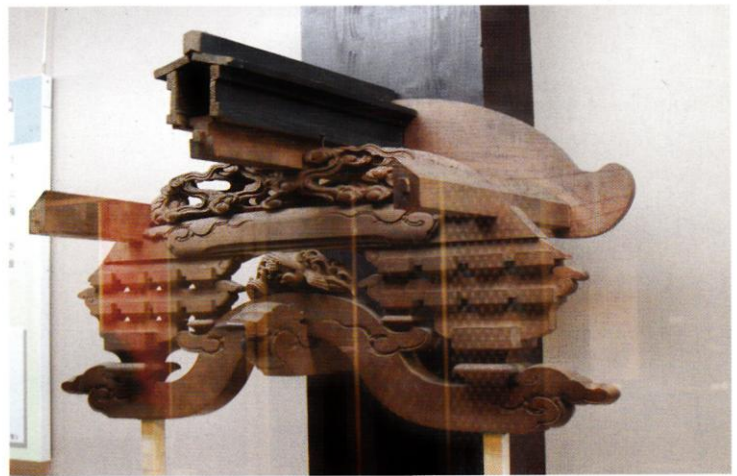


写真5 棟の取り付け

⑤ 「唐破風屋根」の取り付け

「棟木」と「桁」先に造り出されたホゾが、「唐破風屋根」の「屋根表板」内側に掘られたホゾ穴に組み込まれて固定されます。このホゾとホゾ穴は組ごとに形を違えていて、組み違えることはありません。この段階になると、「垂木」・「飾小屋組」・「棟木」・「桁」・「唐破風板」どうしが組み合っかなりしっかりと形作られます (写真6)。



写真6 「唐破風屋根」の取り付け

「唐破風屋根」本体は、角材を格子目に組んで唐破風形に組み上げ、黒塗りして仕上げています。屋根の上面には、障子紙を張り光取りとしていますが、全体に軽量化を図る意味もあったのではないのでしょうか。「屋根表板」の内側には屋根を載せる段差を付け、「桁」の上に直接屋根が乗ります。

⑥ 「飾彫刻」の取り付け

最後に、「鬼板 (おにいた)」の位置に<麒麟>を、「懸魚 (けぎょ)」の位置に<鳳凰>を取り付け、<鳳凰>の両脇には、左右対称の<雲形>が配置され、全てホゾと木製の目釘によって固定されます (写真7)。



写真7 飾小屋組の設置状況

4 大幟が掲げられていた風景

峰大幟についての記録は、唯一、故・本木義治氏が書かれた一文で、武蔵村山郷土の会会報「郷土むらやま第12号(昭和53年9月発行)」に「三ツ木あれこれ～十二所神社の巻 その二～」として掲載されています。その記事をここに再録します。(一部加筆・修正)

十二所神社の例祭日には、三ツ木村氏子中ののぼりは青梅街道よりの参道に、峯村分は橋場(川幡たたみやの前)、宿村分は歩道橋(金井下駄や裏)の処に、それぞれ道を挟んで一対づつ威容を誇ったと言われるが、実際に見た人は明治生まれか大正でも初期生まれの人に限られる為、三ツ木にも数少くなりつつある。紙面の都合で、今回は峯村分のみ書くこととする。

ハサミ 樺材 二間半 (4 m50 cm)

土台木 樺材 六尺角 (1 m82 cm)

竿(柱) 杉材 九間半 (17m27 cm)

簪(彫刻)：砂川一の大樺を取寄せ、赤味部分の一本彫り、本体は横五尺(1 m52 cm)高さ二尺五寸(76 cm)と他に部品十種づつからなっている組物、東京本所住後藤都慶が松やの庭で精魂こめて彫ったと言われる見事なもの。

旗：巾四尺(1 m21 cm)長さ七間(12m73 cm)(両の内反二十枚分)。布地は厚く俗に言うズックでハネダヤの東に住んでいた齊藤さ

んが織り、馬場の反物コーヤで染めたもの。

「撃壊楽堯天」と「謳歌賽豊稔 峯組」「明治七年夏休憩時、萩原秋巖」から成り。

重兵衛大尽と油やで簪部分を、表農園で旗を保管、柱は橋場から残堀に向う道路の青梅街道よりに、長い小屋を設けて置いたが、今では峰の自治会館に旗と簪のみが保管されている。旗には「明治七年夏休憩時」とあり、明治9年の皇国地誌によれば十二所神社の例祭日は3月19日と9月29日になっている。現在の4月8日の祭礼日はいつの頃からかは不明。

最初の頃は幟を立てるのに一週間も前から準備したらしいが、慣れるに従って組内総出一日で完了する様になったと言う。但し、最後の仕上で出る旗の取り付けは鳶職で身の軽い山崎元次郎さん通称計さんに頼らざるを得なかったとの事。万事完了後は、祭日当日まで青年団が、昼やを夜警本部に徹夜で警戒したと言われる。団に対する日当は2円だったと、青年時代を比留間善吉さんは話してくれた。このような行事を大正6年、村に電灯がともし電柱が建ってからは、建てるに建てられず、永久的にみることが出来なくなったという。(以下、削除)

このことから、峰の大幟が4月8日の十二所神社の祭礼に合わせて立てられたこと、立てられた幟が十二所神社参道入口・峰組・宿組の三



第1図 故、本木義治氏原稿にみる峰大幟関係場所等図 (●：幟立の場所：旧青梅街道)

組6本であったこと、峰の大幟が13m弱で、幟竿が17m余であったこと。簷（飾彫刻）が1m 50cm×75cm程度の規模で十点の組物であること、等が判明しました。

5 幟の歴史

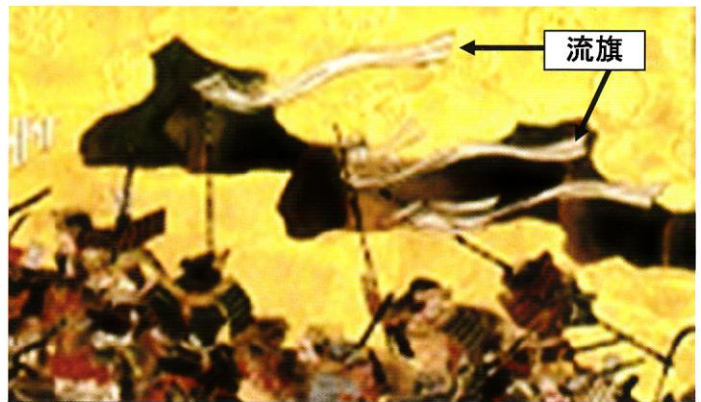
神社の祭礼に立てられた幟は、500年余り前の「戦国時代の軍旗」が始まりとされています。しかし、その前身である旗（はた）は、「魏志倭人伝（ぎしわじんてん）」には「魏国（ぎのくに）より卑弥呼（ひみこ）に旗を送った」との記述が見られ、「日本書紀」には仏教伝来（552年）のときに「仏像とお経と旗と蓋（きぬがさ）を百濟（くだら）の聖明王（聖王）が献上した」と記されていて、少なくとも飛鳥時代以前に大陸から伝わったことがわかります。

当時の旗の形式は、細長い布の一端に横上（よこがみ）という板を繋ぎ、その両端に紐を付け、長い旗竿の先に結びつけたもので、いわゆる「流旗（ながればた）」でした。

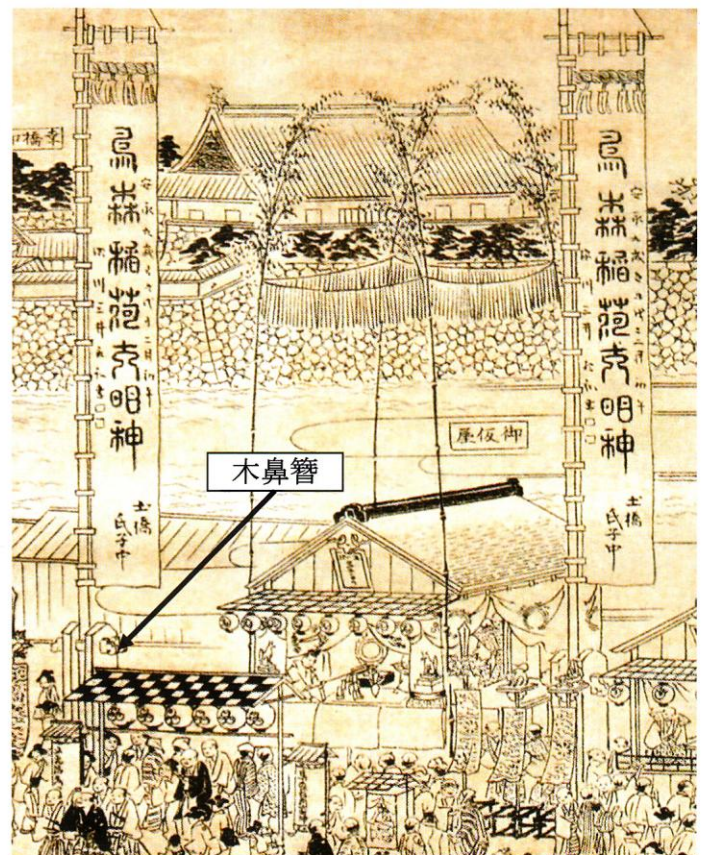
この流旗は、平安時代後期に現れた武士団が軍容を誇示したり、敵味方を識別するために、盛んに用いられました（第2図）。しかし、長くたなびき竹木に絡まるなど、不便であったことから、旗の上端と縦の一边に乳（ち）を付け、竿に通して二辺を固定した幟が、室町時代のころに作られ、全国の武士に広まったとされています。一説には、康正2（1456）年に畠山政長（はたけやまながまさ）と従兄の畠山義就（よしなり）が戦った折、同じ畠山氏の旗では区別がつかないことから、政長が発案したとも言われています。当初は「昇り旗」、略して「昇り」または「乳つき旗」と呼んでいましたが、のちに「幟」の字が当てられたようです。

江戸時代に入り、戦乱が無くなると共に軍旗としての幟は不用となり、その後、神社の祭礼に幟が立てられるようになりました。江戸時代後期に描かれた「江戸名所図会（えどめいしよずえ）」には、神田明神等の祭礼に現在と同じような幟が立てられている様子が見られ、この風習が明治時代以降も続くことになったようです。しかし、これらの絵には木鼻簷（きばなかんざ

短文ではありますが、当時の峰の幟や部材の様子、その経緯などが分かる逸文です。なお、文中に見られる地名や屋号などの位置関係は、第1図を御参照ください。



第2図 源平合戦図屏風・一の谷合戦図（部分）



第3図 烏森稻荷大明神祭礼の図（部分）

し）だけが描かれていて、唐破風（からはふ）屋根付の飾彫刻は見られず、屋根付の「提灯」が幟の近くに立てられているだけです（第3図参照）。

いつの頃から、どのような理由で飾彫刻を掲げ始めたのは不明ですが、武蔵村山市・立川市（砂川一番～十番地区）・あきる野市には「飾彫刻」が見られます。

6 武蔵村山の幟

1) お伊勢の森神明社

幟が掲げられた場所は、神明社の東に南北に延びる道の神明社北東側の辻で、掲げられ始めた時期は不明ですが、太平洋戦争直後は原山神明社に幟竿が保管されていて、祭礼ごとに組内総がかりで運んだとのこと。

昭和28年に旗杭をコンクリートに替えて、昭和30年ごろまでは掲げていましたが、周辺の住宅建設等に伴う電線設置によって、立てることが出来なくなったとのこと。その後、お伊



↑ 境内の幟竿収納小屋

参道横のコンクリート旗杭→

勢の森神明社の境内東側に20mに達する旗竿類保管用の小屋を立てて幟・旗竿など一式を保管していました。コンクリートの旗杭は移築され、鳥居の南に参道を挟むように立っています。



この幟も長さ20m規模の大幟で、原山組として掲げた幟であったようです。お伊勢の森神明社は中藤・横田村の総鎮守として江戸時代に建立されていますから、立てられた辻は原山組と神明社の境となる場所と思われます。

2) 谷ツ熊野神社

鳥居と境内端のほぼ中間に、参道を挟む形で一對の石製旗杭が立てられていて、毎年8月第一土・日曜日に、祭礼に合わせて氏子の人たちによって幟が掲げられています。

神社に向かって右側に立つ旗杭の裏面と幟の揮毫文に「安政六（1859）年」と刻まれていて、現在のところ市内で最も古い幟ということにな



祭に掲げられた幟

木鼻簪

ります。旗竿は基礎を芯棒で止め、旗杭上部では二つある簪穴に、各々木鼻簪を両側から差しこんで幟竿を固定します。一本の旗竿に計四本の木鼻簪を使用され、旗杭両側に木鼻部分が位置する工夫がなされています。なお、現在の幟は、平成19年に古い幟を模写して新調したものです。

3) 下宿稻荷（三ツ木地区）



祭に掲げられた幟

社に向かって左側の獅子彫刻（吽形）

社に向かって右側の獅子彫刻（阿形）

京都伏見稲荷に“天明八（1788）年分社”との記録が残る稲荷社で、現在の幟は文久年間に作られたものを昭和48年にそっくり模写したとのことです。

通常は二本の旗杭で竿を挟む形ですが、この幟は角材状の旗杭一本で竿を支えています。旗杭の形状から、以前は二本であったと思われる。旗杭の外側（社と反対側）に竿を立て、上部を簪で下端を芯棒で止めていますが、簪・芯棒とも社に向かって差し込んでいます。簪の先端は木鼻ではなく阿吽の獅子をかたどった飾彫刻となっていて、獅子の姿が参道側に向かうように彫られています。現在でも、4月1日の祭礼の日に下宿講中の人たちが、かかさず立てています。

4) 宿組の大幟

前記した故・本木義治氏の「峰の大幟」に記載されている大幟の一つで、「金井下駄や裏」に立てられたものです。やはり、故・本木義治氏が武蔵村山郷土の会会報「郷土むらやま第17号（昭和54年11月発行）」に、「三ツ木あれこれ～十二所神社の巻 その四～」としてその詳細を掲載しています。

概要は、大幟の大きさは縦20m・幅1m80cmで、「鎮守御祭礼」「明治四年 辛未年 三月吉祥日 比留間是松書 宿中」と墨書きされ、関東一と呼ばれた砂川十番組幟よりも5m50cmほ

5 まとめ

以上、雑把握ながら峰大幟と飾彫刻を中心に武蔵村山市の幟について紹介しましたが、他地域でも、立川市砂川地区には一番から十番まで立派な飾彫刻があり、あきる野市二宮神社でも飾彫刻付の幟が掲げられています。また、神奈川県平塚市上山八幡神社、大神寄木神社、場入神明神社、伊勢原市比々多神社などでも見られ、一定の地域で広がりを持つと思われます。開始年代や経緯、彫刻師、幟文字の書家など、不明な点は数多くありますが、江戸末期から明治初期にかけて形作られたことは間違いがないようです。宿の飾彫刻は砂川七番山車の彫刻師と同じ人物の作とのことです。峰大幟飾彫刻の

ど大きく、旗竿の長さは十五間（約27m）で、五日市街道の辻が曲がり切れず、先端を切り落としたとの逸話が残っているとのこと。飾彫刻も立派で、横長彫刻（貴長房仙人・王夫人）は横1m30cm・縦66cm、縦彫刻（昇り龍・降り龍）は横65cm・縦1m35cmの大きさです。

現在、飾彫刻はアクリルケースに入れて宿葉師堂本堂に、旗杭は倉庫内に保管されています。倉庫内に保管されていた幟・簪等の部品一式は、平成23年6月に歴史民俗資料館へ寄贈いただきました。



形態が山車に近似していることは肯けます。これからの調査に期待します。

<参考文献>

1. 立川民俗の会「立川民俗第16号」平成20年3月発行
3. 立川民俗の会「立川民俗第17号」平成22年12月発行
2. 入間市教育委員会「入間市の幟」平成7年3月発行
4. 武蔵村山市郷土の会『昭和54年度武蔵村山市文化祭「村山の祭礼のぼり展」』平成54年11月発行
5. 武蔵村山市郷土の会「会報郷土むらやま第12号」平成53年9月発行
6. 武蔵村山市郷土の会「会報郷土むらやま第17号」平成54年11月発行
7. 武蔵村山市郷土の会「稲荷信仰の今昔」平成63年11月発行

1 特別展「武蔵村山の軽便鉄道」

村山・山口貯水池建設の概要や変遷、市内に残る軽便鉄道関係施設の跡地、貯水池工事中に活躍した機関車・トロッコについて紹介しながら、市民及び関係者の方々からご寄贈等いただいた約 80 点の写真を中心に、貯水池工事写真のアルバムや車輪・枕木などの実物を展示しました。詳細は『平成 22 年度特別展解説書「武蔵村山の軽便鉄道」』（定価 150 円）をご参照ください。なお、この期間に合わせて、文化財見学会「軽便鉄道跡地を歩く」、歴史講座「村山・山口貯水池と軽便鉄道」を開催しました。

* 展示期間：平成 22 年 10 月 9 日～11 月 30 日



展示風景（ウォールケース部分）

2 市制 40 周年記念企画展「写真で見る武蔵村山市の移り変わり」

平成 22 年 11 月に市制施行 40 周年をむかえることを記念して、昭和 22 年の市全域航空写真を始め約 10 年ごとに撮影された航空写真や市内風景写真を中心に紹介し、武蔵村山市の移り変りの様子がわかる企画展を開催しました。

7 資料館入館状況

月	区分	開館日数 (日)	利用者数 (人)	市 内		市 外	
				人数 (人)	割合 (%)	人数 (人)	割合 (%)
4		28	1,136	401	35.3	735	64.7
5		29	1,315	516	39.2	799	60.8
6		20	825	403	48.8	422	51.2
7		29	868	449	51.7	419	48.3
8		29	912	334	36.6	578	63.4
9		28	728	281	38.6	447	61.4
10		29	2,787	889	31.9	1,898	68.1
11		28	1,713	546	31.9	1,167	68.1
12		25	697	286	41.0	411	59.0
1		26	837	420	50.2	417	49.8
2		26	1,215	540	44.4	675	55.6
3		29	1,114	646	58.0	468	42.0
合計		326	14,147	5,711	40.4	8,436	59.6

* 展示期間：平成 22 年 5 月 22 日～6 月 20 日

3 夏休み子ども展示「土のふしぎー石・砂・土のなりたちー」

武蔵野台地のなりたちを紹介しながら、市内の地質調査で採集した土などを展示しました。また、実体顕微鏡を使っての火山灰の観察や、土の標本を作る体験コーナーでは、子どもたちが夏休み自由研究として活用していました。

* 展示期間：平成 22 年 7 月 24 日～8 月 31 日

4 子ども体験教室「星の動きを観察しよう」

今年は、5 月に金星探査機「あかつき」が打ち上げられたことをきっかけに、金星をテーマに観察を行いました。天体望遠鏡を使って夕方の明るい時間帯から見られる金星の他、土星、おとめ座/スピカ、はくちょう座/アルビレオなどを観察しました。

(1) 期日：平成 22 年 8 月 7 日 (土)

(2) 会場：武蔵村山市立歴史民俗資料館・のぞみ福祉園駐車場

(3) 講師：高橋芳弘氏 (昭島天体観測所)

5 文化財見学会「軽便鉄道跡地を歩く」

(1) 期日：平成 22 年 10 月 23 日 (土)

(2) 会場：トンネル群～野山北自転車道

(3) 講師：石川伊三郎氏 (武蔵村山郷土の会)

6 歴史講座「村山・山口貯水池と軽便鉄道」

(1) 期日：平成 22 年 11 月 28 日 (日)

(2) 会場：武蔵村山市立歴史民俗資料館

(3) 講師：北村拓氏 (東京都立戸山高等学校教諭)

狭山丘陵南麓西側の自然 part 2 ー スミレ

前回の植物を中心とした「狭山丘陵南麓西側の自然」に続いて、今回は「スミレ」を紹介します。写真提供及び情報提供は前回同様、吉田政一氏です。現在、この地域で確認されている「スミレ」は 21 種で、植物名については資料館で確認していますが、間違いや不明な点がありましたら、資料館までご連絡ください。なお、撮影日は 2011 年、撮影地点は前回同様、割愛させていただきました。また、紙面の都合で撮影した全種類は掲載できませんでした。

近年、健康増進、リフレッシュ、自然保護等の観点から、自然の中を散策する方々が増加傾向にあり、歴史民俗資料館にも自然に関する問い合わせや見学者が増えています。先日、“今の時期にどのような鳥が見られますか？どこで見ることが出来ますか？”と入館者の方から聞かれました。自然豊かな狭山丘陵の懐に建つ歴史民俗資料館として、今後さらに、自然分野への対応強化の必要性を痛感しました。



アオイスミレ (3月中旬撮影)



コスミレ (3月下旬撮影)



ナガバノスミレサイシン (4月上旬撮影)



アリアケスミレ (4月中旬撮影)



エイザンスミレ (4月上旬撮影)



オトメスミレ (4月上旬撮影)



ヒゴスミレ (4月上旬撮影)



ツボスミレ(ニョイスミレ) (4月下旬撮影)



サクラタチツボスミレ(4月中旬撮影)



フモツスミレ (4月上旬撮影)



タカオスミレ (4月上旬撮影)



ノジスミレ (4月中旬撮影)



マルバスミレ (4月下旬撮影)

発行：武蔵村山市立歴史民俗資料館

〒208-0004 東京都武蔵村山市本町 5-21-1

TEL 042 (560) 6620/FAX 042 (569) 2762

Mailアドレス mmc-reki@blu.m-net.ne.jp

HPアドレス <http://www.city.musashimurayama.lg.jp/shiryokan/index.html>